

埼玉育ちのグローバル人

中東、時々埼玉。彩の国から世界を覗いてみた。

第2回「サイタマ編」

JICA 企画調査員 廣瀬 勝弘



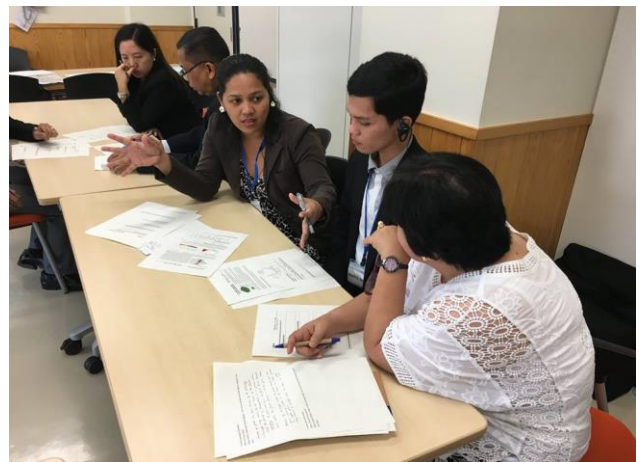
サイタマ編

前回のリレーエッセイでは青年海外協力隊としてヨルダンで活動していた頃のお話をしました。今回はその後の日本でのことをお伝えします。

ヨルダンでの任期も終わりが見えてきた頃、日本に帰ってからの進路を考え始めていました。縁あって国際協力の仕事のほんの一部に携わったことで次は、日本で国際協力に関わりたいたいと思っ

ている方たちへの協力や、或いは国際協力や青年海外協力隊のことをもっと知ってもらいたいという思いから JICA の国際協力推進員（埼玉デスク）の仕事を担当させていただきました。

2015年10月に着任して以降、この業務では埼玉県内の様々な団体や人々と協働させていただきました。県庁を始め、埼玉県は海外への関心が高い団体や個人が多いことが特徴だと思います。県内の自治体だけでなく NGO、企業、大学、学校とも色々な仕事をさせていただく中で、埼玉県と世界との繋がりをたくさん実感しました。フィリピン、ブラジル、ベトナム、ラオス、ブルキナファソなどの国における埼玉発の国際協力の輪が現地で実を結び、再び埼玉に還元されていく例も多く目の当たりしてきました。



埼玉県教育委員会による JICA 草の根技術協力事業の研修を受けるフィリピンの教員の皆さん

他にも、学校等で青年海外協力隊や国際協力のことをお話する機会も多く頂いた中で、海外に関心を寄せる子どもたち、途上国の人々の支えになりたいと自分に出来ることを一生懸命探す若い世代の方たちにもたくさん出会えました。

国際協力はどこか遠い国で行われているよく分からないものではなく、埼玉とも、日本とも深く関わっているととても身近なものだと感じてくれたならとても嬉しいことです。



埼玉県国際交流協会、埼玉 NGO ネットワークと共催したグローバルセミナー



JICA 教師海外研修で訪れたザンビアの農村

ヨルダンでの2年間を終え埼玉にやってきた頃、急激に街で見かける外国人の数が増えたものだなと感じていました。埼玉は観光客や在留外国人も多い県だからという事もあるのですが、日に日に世界との距離が縮んでいくのを実感していました。

しかし一方で外国人の方々にとって日本は快適な場所なのだろうかと思う場面も。例えば役所や病院では多言語に対応している所は限られていますし、公共交通機関も日本語が理解出来ないければとても難易度の高い手段です。

外国人として海外で暮らして埼玉に戻ったときに、ようやくその困難を想像することが出来たように思います。埼玉という所は、内側から世界を眺めるのに格好の場所でした。

さて、とりとめの無い話でしたが次回最終回では埼玉での仕事を終えた2018年6月より後のことをお伝えしたいと思います。